

氏名	内崎 章太		
ヨミガナ	ウチザキ ショウタ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博第 23 号		
学位授与年月日	2025 年 3 月 15 日		
学位論文題目	L. v. ベートーヴェンのダンパー・ペダルの用法 ——同時代の作曲家との比較を通して——		
博士論文審査委員会	（主査）	教授	岡田 敦子（ピアノ）
	（副査）	教授	村田 千尋（音楽学）
	（副査）	教授	石井 克典（ピアノ）
	（副査）	准教授	新林 一雄（音楽学）
	（副査）		山名 仁（ピアノ） （和歌山大学教授）
博士演奏等審査委員会	（主査）	教授	岡田 敦子（ピアノ）
	（副査）	教授	石井 克典（ピアノ）
	（副査）	教授	大竹 紀子（ピアノ）
	（副査）	教授	木野 雅之（ヴァイオリン）
	（副査）	教授	釜洞 祐子（声楽）
	（副査）	教授	藤原 豊（作曲）
	（副査）	教授	村田 千尋（音楽学）
	（副査）		平井 千絵（フォルテピアノ） （東京藝術大学講師）

## 審査結果の要旨

### 1. 博士論文審査委員会

日	時	2025 年 2 月 8 日（土）13 時 00 分～15 時 30 分
場	所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス C 405
判	定	合
審査結果の要旨	<p>本研究は、ベートーヴェンにおけるダンパー・ペダルの使用実態、指示方法、音楽への影響について論理的に検証したものである。まず評価されるべきなのは、この作曲家のピアノ作品のみならず、協奏曲、室内楽を含むピアノが使用された曲目全てを対象とした点である。それに加えて、同時代に発行された数多くの教則本を参照し、更に、61 名にも及ぶ同時代の作曲家の使用法を詳しく調査、検討した点も高く評価される。また、「止音の回避」というダンパー・システムの本質的な機能を発端として、このシステムから得られるさまざまな表現を分類し、体系的に説明するという構成も、説得力のあるものとなっている。</p> <p>以上の緻密な調査と論理的思考のお陰で、先行研究では指摘されてこなかった、ベートーヴェンと同時代の音楽家に共通するペダルの用法とベートーヴェン独自のペダルの用法を分けるという成果を得ることができ、既に知られているベートーヴェンのペダル用法（ペダル指示）の実際の効果の度合い、用法の起源までを明確にすることに成功している。また、当時のペダル使用方法が作曲家の楽曲によってどのように捉えられ評価、批判されていたかも詳細に調査されており、当時の人々のペダル効果に対する感覚がより明確になった。</p> <p>従って、今後ベートーヴェンの、あるいは古典派作曲家の作品を演奏しようとする者、さらにはペダリングの歴史を研究する者にとって、極めて高い有用性を持つと言える。</p> <p>その一方で、改善すべき点もいくつか指摘できる。</p> <p>ダンパー・システムを指示する記号を論じた部分が時系列に沿った論法をとっているのに対し、ダンパー・システムの効果と曲の形式との関連を含む「音楽要素への影響」を論じた個所などでは、時系列に沿った記述が採られていない。本人も今後の課題として挙げてはいるが、ベートーヴェンはその生涯をとおして、時期ごとにピアノ曲における形式などを大きく変化させているので、形式を含む「音楽要素」の時期ごとの変化とペダルの使用法は関連するののかという疑問が残った。</p> <p>この論文ではペダル使用の方法論が述べられるだけでなく、「実際にどう聴こえるか、実際どのような効果が耳に届くのか」という前提のもとに論じられているところも評価できる。しかし、19 世紀におけるピアノの構造の変化と、それに伴う楽器の響きの変化にほとんど言及していない点にも疑問が残る。先行研究が示した基本的な内容を整理することにより、ピアノの構造と響きの変化を概観する必要があったのではないだろうか。</p> <p>今後、この研究を実際の自らの演奏に更にかしめてもらいたい。ペダルのみならず打鍵と耳とを総合的に使って、この研究の成果が実際の演奏でより説得力を持って聴かれることを期待したい。</p>	

## 2. 博士演奏等審査委員会

日	時	2024 年 7 月 10 日（水）18 時 30 分～20 時 00 分
場	所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス TCM ホール
判	定	選曲、プログラム解説、演奏の内容ともに秀逸であり、博士号取得に敵うものと認められる。
審査結果の要旨		<p>シュタイベルト、ヴェルフル、フィールド、ベートーヴェンを選曲したプログラムは、1793 年～ 1817 年の 24 年間にわたってペダル効果が音楽表現に何をどうもたらしたかを巧みに示しただけでなく、コンサートそのものとして十分に楽しめるものであった。</p> <p>楽器はスタインウェイとファツィオリの 2 台から選ぶことができたが、スタインウェイより音が明るく軽いファツィオリを選び、作曲家毎にペダルの機能と効果が変わっていることを十分に消化して、それぞれ適切な音楽表現に結びつけていた。博士研究における 1800 年前後のペダルについての探求が、作品への深い洞察と、足と手の微妙なコントロールを司る注意深い「耳」を養うことにつながっていることがよく示され、終始一貫してクオリティの高い演奏となった。骨格のよくみえる力強さから繊細さ、柔軟性、さらには現代ピアノからは聴かれたことない una corda の音色、スクエアピアノを思わせる音色も、といった感想が審査員から寄せられた。</p> <p>一方、ヴェルフルではハンガリー風な異国趣味を強調して提示する必要がある、もっと自由で、遊びの要素が欲しい、フィールドではもっと不等分な奏法や耽美的な表現が聴きたい、またベートーヴェンではもっと和音の種別（たとえば属 7 の和音と増 6 の和音）が弾き分けられるのではないか、という意見もあった。</p> <p>このリサイタルが、古典派の音楽が従来の一般的な印象より幻想的で楽しいものだと思わせることに成功したであろうことも、評価したい。</p>

以上